

## 一 四高時代の思い出

## 『金沢は壁から謡が洩れて来る』

高橋 治

こんな川柳「金沢は上から謡が降って来る」。同種のもので「金沢に屋根から謡が降って来る」というものもある。

私は無教養で謡に関しては全く心得がない。だが植木の天辺や屋根の上で仕事をしている金沢の職人が、謡を口ずさんでいる光景なら、いかにも金沢らしいもので、ごもつとも賛成の意を表する。

しかも、日本広しといえども、金沢以外にこんな町はないだろう。

植木屋や屋根職の口から特に異様な感もなく謡が洩れてくる。それはどんなことなのか。もつともらしい方をすれば、この町をすつぱりとくるみこんでいる文化の広さだといえそうだ。あるいは深さといひ換えても良いのかも知れない。

その謡に関して、金沢の人々を必要以上に刺激するかも知れないが、金沢には加賀宝生という呼び方があり、東京ではそれを田舎宝生といった。花のお江戸が文化の中心だといわんばかりの、いわれなき思い上がりである。ことほど、現在、日本の文化全般に関し、金沢があつてこそ水準が保たれているものがどれだけあることが、東京が「花の」と浮かれている中に、様々の分野で逆転現象が起こってしまったのである。金沢の文化地位が上がった。

少々、話が本筋から外れた。私が謡に関していいたかったのは、私の場合、屋根から降って来るのではなく、壁越しに隣家から聞こえて来るという話だったのである。

このことに関し、なに分にも欲が無かつたのだらう、聞こえてくる謡を習おうという気持ちにはならなかつた。それでも、いくつか好きな謡本は古本屋で買って来て、壁越しに耳を傾けたりしていたものだ。

これは、つまり、金沢時代私が厄介になつた家が、謡の師匠の隣家だったということなのだ。屋根から降るどころか、謡にどつぷり漬かつて毎日を暮らしていたといつても良いほどであつた。なぜそんなところに部屋を借りたのかだが、これには、金沢でなければ考えられないきさつがある。

金沢には市中を流れる二本の川があつて、男川と呼ばれる犀川、女川といわれる浅野川の二本であることは誰もが知っている。しかも、男女と対比されるくらいだから、両者の景観から周囲の景色まで全く違っている。

その女川の印象を豊かに持った作家が泉鏡花である。私が旧制中学を千葉で終えて、次の進学先に金沢を選んだ最大の理由は、金沢が鏡花の故郷であることへの憧れである。金沢の郊外に特設された寮で一年、金沢城の中に建てられた第九師団の兵舎を寮に使って半年を過ごし、その後私は町中に住んでみたくて下宿を探すことに決めた。

昭和二十四年の秋口である。金沢は戦災を受けなかつた数少い町のひとつだったから、戦前の日本の生活様式がまだ豊かに残っていた。だから、住宅事情の厳しさを反映するような不動産屋があつたかどうか、記憶が確かではない。仮にあつたとしても、市中の盛り場、香林坊や片町にあつたとは考えられない。また、あつたとしても、極度に貧乏学生だった私には、権利金、敷金、礼金などといった余分な費えを払う金力があるうはずもなかつた。

といつて、国土の大半を焼かしてしまつた日本なのだ。無事に戦争の中をやり過ぎた金沢とはいえ、戦前の日本にあつたような「貸家」という札が斜めに貼つてある光景も見当たらない。そこで、この町と目標を定め、一軒一軒、貸してくれる部屋はないかと聞いて回ることにした。

無茶もいいところの話である。しかも、その目標なるものを、鏡花が生まれ育つた女川河畔と、香林坊にあつた学校（第四高等学校）の中間あたりと、勝手に決めてしまつた。いうまでもなく、第一の目的は通学、第二の目的は、鏡花の故郷の空氣に触れて暮らすことである。

今にして、しみじみと思いだして、胸に暖いものがこみ上げて来るのは、次々と一軒ずつ紹介もなしに回って歩いたのに、厭な思いをさせられたことが一度もなかったことなのだ。相手に出てきた側にも、途方もない無茶さ加減をとがめる様子は全然なかった。

変ないい方になるが、四高生が身を包んでいた黒いマントの威力なのだ。先方が盲目的に抱いていた期待にどれだけそうことが出来たかは大いに疑わしいのだが、金沢市民には一種の幻想があった。四高生はいまはまだ苦学生に身をやつしているが、いつかは帝国大学を卒業して、世の中のために立派な仕事をしてくれる。

市民一人一人が、どうも錯覚と善意にみちた期待を持ってくれていたのではなかるうか。これはかなり根の深い問題で、「天下の書府」と呼ばれた北陸の一大雄藩に、他の諸藩が遠く及ばなかったのは、学ぶ価値を極度に高く置いたことと関係がありそうだ。それが明治期に入って、第四高等学校の生徒に対する親しみに受け継がれて行く。

だから、私も三年間金沢にいた間に、どれだけこの金沢市民の好意的な視線の中で、のびのびと生きたか計り知れないものがある。決して、それに甘えて良いとは思っていないのだが、「四高の生徒さんのやることやさかい」と、大抵のことに寛容に見まもってもらえたものだった。

実は、問題の下宿探しも、そんなところに端を発している。その目的の町でも、四高の生徒さんがやることだからと、住民も真面目に相手をしてくれた。それどころか、自分のところに貸せる部屋はないが、あの家なら老夫婦だけだからとか、子供がまだ小さいから勉強の邪魔になりませんかとか、様々な好意的な情報を与えてくれた。

結局、老夫婦と子供二人を抱えた出戻りの女性が住む家で、二階の十畳の座敷を貸してくれることになった。しかも、切腹用の部屋だといわれる長四畳がついた立派な座敷だった。こうして、私は鏡花が呼吸して育った浅野川近くの住民になる。

住みついて間もなく、部屋探しに一軒一軒訪ねた家々の人たちが、私のことを覚えていてくれることに気づかされた。挨拶の親しさと、「部屋があつて良かったですね」といわんばかりの微笑に、暫時はこの町の住民だという一種の承認がこもるのである。

こうして住みついた謡の師匠には、美しくしかも可愛い十八、九の娘さんがあつた。人の縁などというものは、良い方向に転がり出すと、次から次に意外な展開を見せるもので、このお嬢さんが四高に勤めていた。しかも、気さくで美貌で鳴る人だったから、人気が高い。

その上、この人の仕事の中に生徒の出欠簿の整理が入っていた。私は成績不良で落第しかけたし、小説を読み図書館に入りびたり、放課後は野球部の練習に打ちこむといった毎日で、少し暇があると映画館に走りこむ。学校の勉強に打ちこむ時間などなかった。出欠簿も欠席を示す斜線ばかりが並んでいる。

そのままでは出席日数不足で落第する。それを救ってくれたのが、隣家のお嬢さんだった。消しゴムで適当な時間数に合せてくれる。

これは有難かった。思えば良い町に下宿して、多くの良い人にとりまかれていたのだ。

## 金沢は壁から謡が洩れて来る。

高橋 治（たかはし おさむ）

一九二九年千葉市に生まれる。旧制四高、東京大学文学部を卒業後、松竹に入社し映画監督と脚本の執筆活動に入る。

その後同社を退職し本格的な執筆活動を開始。

泉鏡花記念金沢市民文学賞（『派兵』七七年）

直木賞（『秘伝』八四年）

柴田錬三郎賞（『分かれてのち恋歌』『名もなき道を』八八年）

吉川英治文学賞（『星の衣』九六年）を受賞。

現在（財）白山麓僻村塾特別顧問。

